

# ふるさとファイル

展示コーナーだより  
第71号  
平成29年9月  
生涯学習課



## 楊谷寺の復興と 観音信仰

展示期間 平成29年9月26日(火)  
～平成30年1月28日(日)

※図書館休館日を除く  
※期間中、一部、展示内容が変わります

楊谷寺は、平安時代初期の大同年間(806～810)、円鎮(延鎮)僧都による開基とされます。鎌倉時代の初期には近隣の人々の信仰を集めていたことが分かっています。その後、兵乱や地震により衰退した楊谷寺は、慶長19年(1614)に再興され、江戸時代には皇室の崇敬を得ることとなります。その一方で、楊谷寺は近畿など各地から観音信者や眼病治癒を願う人々がさかんに参詣する、庶民信仰の寺でもありました。

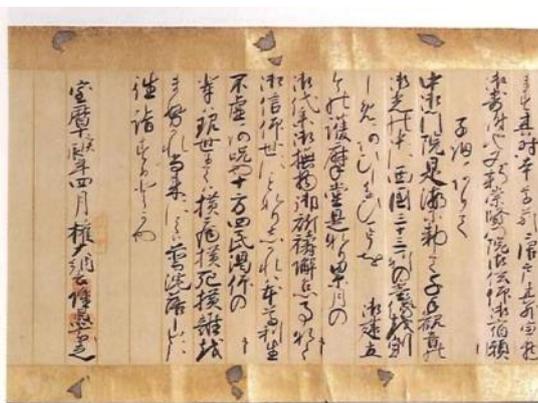
今回は、楊谷寺の復興と江戸時代の観音信仰のようすを、古文書や境内写真などから紹介します。

### 元和の観音講結成と量空是海による復興

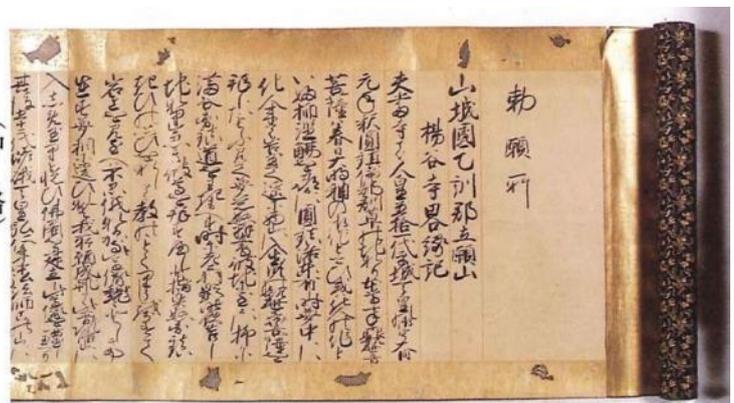
いつの頃からか衰退していた楊谷寺は、慶長地震により大きく損壊しますが、慶長19年(1614)に禅僧の芳室土釜(山崎妙喜庵の人)が再興しました。

土釜の後継者円道が住持であった元和9年(1623)には、柳谷観音を信仰する観音講が向日町の商人など近隣の人々により結成されます。講とは同じ信仰を持つ人々による結社です。さらにこの講元(責任者)が楊谷寺の霊水の効能を広めたところ、新たに京都にも講ができたといえます。

このち元禄6年(1693)に住持となった量空是海は、霊元上皇の眼病を祈禱により治癒させ、以後、楊谷寺は皇室の崇敬を得ることになります。また是海の時代には初めて本尊千手観音(柳谷千手観音)が開帳され、柳谷観音の名が広く知られるきっかけとなりました。



(中略)



楊谷寺略縁記 宝暦10年(1760)、鷲尾隆照(1713～74) 楊谷寺蔵

大同元年(806)の楊谷寺開創に始まり、平安時代の楊谷寺の興隆を示す伝説や、慶長年間の芳室土釜による再興が述べられています。後半には霊元上皇ら皇室の人々の信仰など、江戸時代の出来事が記されています。

## 増加する参詣者

本尊千手観音が元禄7年(1694)に初めて開帳されて、多くの人が楊谷寺に参詣するようになり、翌8年には門前に茶屋ができています。

その後も楊谷寺では33年に一度の開帳や臨時開帳が行われ、境内の堂舎だけでなく参詣者のための施設も整備されていきます。

日帰りの参詣者だけでなく、一定期間本堂に籠もって(参籠)祈願する人も多かったようです。寛政12年(1800)の楊谷寺の規則からは、参籠者のなかには眼病を患う人々もいれば武士もいたことがうかがえます。



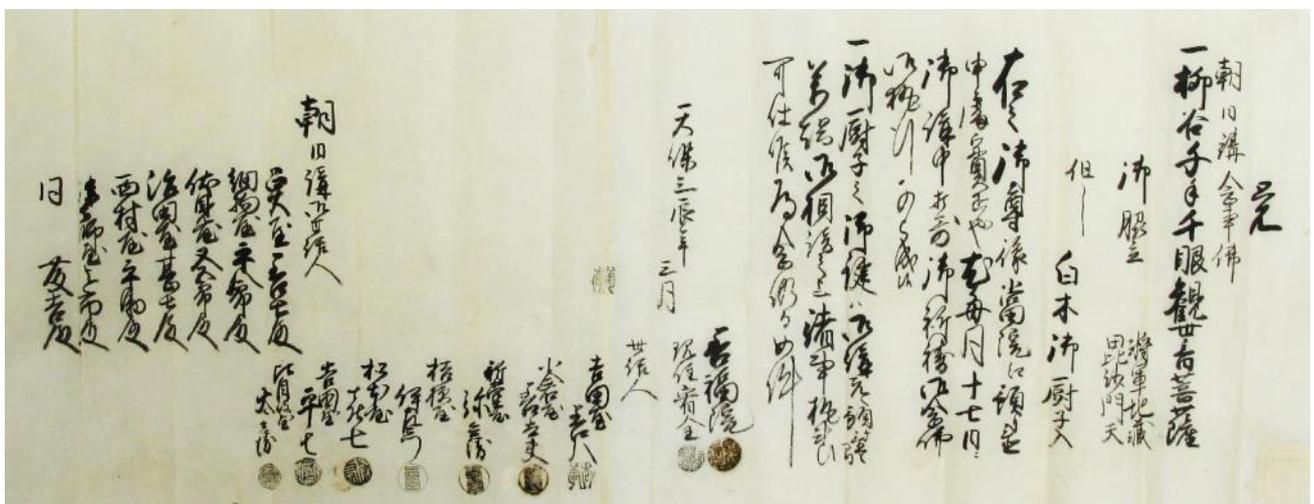
「拾遺都名所図会」 天明7年(1787)

境内には参詣者が多く描かれ、楊谷寺が信仰を集めて大いににぎわっていたことがわかります。山門の下(画面左下)に茶屋風の建物が複数描かれているのが見えます。

## 各地の講と信者の観音信仰

「柳谷千手観音」を信仰する講は、江戸時代後期には京・大坂、摂津・河内など近畿各地を中心として、伊賀上野(三重県)・尾張知多郡(愛知県)など遠く離れた土地にも結成されています。柳谷観音の模像を造り、念持仏として日常の信仰の対象としていた講もあります。

各地の講や信者は、ときに参詣するほか、堂舎修築の費用や、提灯の張替え料・灯明料など日常的な維持費も寄進しました。楊谷寺は檀家を持たないため、講や人々の信仰に基づく協力は寺の維持に欠くことのできないものでした。講や信者は石灯籠・扁額なども数多く奉納しており、それらは現在も境内各所で見ることができます。



「朝日講念持仏預かりにつき覚」 天保3年(1832) 楊谷寺蔵

伊賀上野の朝日講は、念持仏としていた柳谷千手観音の模像を、上野の善福院に預けています。朝日講は上野の商人たちが結成していたらしく、毎月17日に善福寺に集まり祈禱・念仏を行うことになっています。